

ある日、塾からの帰り道、偶然鉢合わせた父と歩いていると、自家醸造ビールを提供している店の前を通りかかった。昼間から繁盛している店を横目で見ながら、父は私に突然こんな質問をした。

「酒を個人で勝手に作ってはいけないという法律があるのは知ってるな。酒を作るには特別な免許が必要なんだが、どこで取れると思う。」

「国民の健康に関係すると思うから、厚生労働省あたりかな。」

「実はね、国税庁なんだよ。酒には酒税がかかるだろう。酒税は国の大事な財源の一つだから。缶ビールの値段の半分弱は酒税なんだよね。」

俺はビールを飲むことで国に貢献しているんだ、と父は笑って話を締めた。父が普段飲んでいるビールにそんなに税金がかかっていたと思うと私はすっかり驚いてしまって笑えなかった。酒税とはどんな税金なのだろうか。

酒税とは、アルコール分が1%以上の飲料にかかる税金である。様々な種類の酒を製造方法や性質から分類し、それぞれ製造場から出した酒の量一軒あたり一定の額の税を課している。いくつかの品目で製品一本あたりの小売価格とかかる酒税額から税込価格に占める酒税額の割合を算出してみた。ビール三八・四%、発泡酒二八・〇%、焼酎二九・八%か二四・〇%、リキュール二三・六%、日本酒、ワインなど醸造酒二三・六、ウイスキー一四・六%だ。いずれも消費税より高く、その中でもビールの酒税率が一際高いことが分かる。酒税が全体的に高額なのは何故か。また、何故ビールだけ際立って高いのか。

酒税が高額な理由は主に二つだ。一つは、昔から国の重要な財源だったからだ。酒税は鎌倉、室町時代に誕生、室町時代には最も重要な財源と位置づけられ、江戸時代になると追加で酒蔵に営業税がかけられるようになった。そして明治時代になると軍事費を増強すべく大幅に増税された。今でこそ緩和されているがその名残が比較的高額になっている。もう一つは、酒は嗜好品だからだ。生活必需品とは違い、生活する上で必ずしも必要になる品ではない。そのため、買って消費するならその分お金の余裕があると見なされ、割高に課税されている。このように高い担税力を持つものがより重い負担をすべきという考え方は垂直的公平の原則と言われ、税金負担の考え方の一つである。ビールへの課税額が高いのも、その考え方に理由がある。ビールは今でこそ安価な大衆向けの酒だが、かつては舶来からの高級酒だった。その名残だろう。

酒税のことを調べてみたら、そこには税の負担がなるべく皆に平等にかかるようにするための工夫があった。この調べ学習を通して、酒税という税金について深く学べたとともに、国民が豊かに暮らしていくための政府の働きを感じ取れたように思う。